
まだ誰も知らない【Relieve one another】

西東ゆうじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ誰も知らない【Relieve one another】

【Nコード】

N2187V

【作者名】

西東ゆうじ

【あらすじ】

ある大学教授の葬儀の最中に、その娘・阿賀佐真記女史が遺体となって発見される。女史の遺体が発見されたのは、完全な密室の中。その密室からは、大気さえ抜け出せない……。

S 大学助教授・褥創介と女子学生・美原澤椎華が、この不可解な謎に挑む。

いらぬオーブニング

1

今の季節を頭の中で再確認しながら、美原澤椎華は目の前に目当ての人物が現れるのを待った。夏の暑さに対して正常に流れ出た汗は数分前にひとしきり気化し、今は冷房のよく効いた室内の中で感じる肌寒さに変化していた。上着がなくては、本当に寒い。彼女はカーデイガンを愛車の後部シートに放置してきた事を、ひどく後悔していた。何時間か前までは持つてきた事を後悔していたが、それは逆転している。今彼女が一番欲しいものは、それか、温かいコーヒードった。

(設定温度は何度なのかしら……)

椎華は両手で二の腕を抱くように摩擦した。触れた手のひらも冷たくなっていたが、室温よりはあたたかかった。

腕を撫でながら自然と丸まっていた背を地面に対して垂直にするのと、そこで彼女は自分が通された部屋の内装を確認した。

確認といっても、その部屋には彼女と、彼女が座っている椅子しかなかった。その椅子は、どうやら移動ができないものであるようだ。部屋に通され座るように促された時、そこにあるものが椅子であるのだと彼女は認識できなかった。それは床から生えた突起のように、部屋の中心に置かれている。いや、生えているのだから、置かれているという表現はこの場合不相当となる。

椎華は部屋に入っすぐに突起物と床との接点を確認したのだが、それは後から接着されたのではなく、どうやら床面と完全に一体化されているらしい事が判った。そうになると、今この部屋にあるものとは、彼女だけだった。それ以外のものは、なにも、なかった。

目の前の壁にある大きなモニタも壁と一体化している。埋め込ん

でいるのではなく、壁と共にモニタを作らなくては出来上がらないような代物だ。そのモニタは先程から鏡のように椎華がいる部屋と同じ風景を映し出しているが、しかしそれは鏡ではなかった。そこに彼女は映っていない。

そこで椎華は、この部屋が密室である事に気付いた。彼女が入室に使用したドア以外に、この部屋には人としても空気としても出口が存在していなかった。壁と床と天井を見るが、換気口などは見当たらない。

その部屋には、本当に彼女しかなかった。彼女だけが、その部屋の中にあつた。そして彼女以外のすべてが、白だった。床も、壁も、天井も、突起も。

(どうやって部屋を冷やしているのかしら……)

純白の部屋の中でただ座り続けるしかない椎華は、頭の中で自分の首を斜めにした。頭の中には、大学の実験室にある床置き冷凍ストッカーが浮かんでいた。空調ではなく、この部屋はそういったシステムで冷却されているのかもしれないと考えた。部屋は寒いが、風が流動していない事は自分の肌が証明している。彼女の肌を過剰に冷やす部屋の空気は、彼女が動かない限りは停止している。

だがそれは、椎華が吸い込んでいる空気がどこから届けられているのかという疑問に対しての解答にはならなかった。彼女はこの部屋ですでに十分ばかりを過ごしているが、室内の酸素量に変化はなさそうである。これは、どこかから酸素が送り届けられているという事だと彼女は推測する。しかし、それがどこから、どういった仕組みで送られているのかは、推測さえできなかった。

(それにしても、本当に寒い)

椎華は伸ばした背を再び丸めた。

それと同時に、目の前のモニタに変化が起きる。

右側から、女性が現れた。女性はスライドするような歩き方でモニタの中央まで来ると、椎華と同じように、そのモニタの中心にあつた突起に腰を下ろした。女性の長い黒髪を見た時、椎華は世界に

は色が存在していた事を思い出す。女性は白いワンピースを着ていて、手袋をはめていた。手袋も白い。そう言えば、この研究所に来てからというもの、色というものと触れ合っていない。すべてが白かった。そのせいで、目の前に久しぶりに登場した髪の毛の黒さだけが際立って感じられたのだ。

自分の背中の中も思い出した。椎華は慌てて背筋を伸ばす。寒さに長時間あてられた彼女の背筋は硬くなっていて、急に動かすと音が鳴りそうだった。

「貴女の論文を読みました」女性は囁くような声でゆっくりと言った。「とても面白いですね。でも、少しコンベンショナルなテーマでした。それが残念……。ああいったものは、よほどに奇抜なものでない、大概正当な評価を得られません」

椎華は自分が提出した論文を思い返ししながら、目の前の女性が興味深いや感心したといった表現ではなく、面白いという単語を選出した事に対し複雑な思いを抱いた。

「ありがとうございます」椎華は頭を下げ、頭頂部がモニタに向くようにした。「読んでいただけるとは思っていませんでした」

「あら。読まれることを想定しないで書くの？ それは、おかしいわ」

「いいえ、そんな事は……」

「海の中に家を建てるようなものじゃない。違うかしら？」

「方法次第では、海の中に家を建てて、そこで暮らす事もできます」

「空気を海面から取り入れながら？」

「ええ、この部屋のように。この部屋はどうやって空気を循環させているのですか？ 見たところ、空気の入出口が見当たりません」

「この部屋は正立方体です」女性が言った。「一辺は7メートル。」

「誤差はありません。貴女が座っている椅子は30センチの正立方体」

「3億4297万、……3千立方センチメートルです」椎華は天井を見上げながら言った。

「計算が早いね。でも、どうしてセンチメートルで計算を？」

「わかりません」

「どうして体積の計算だと思ったの？」

「椅子の大きさの事をおっしゃったからです」

「天井に小さな穴が開いています。見えないでしょうけれど……」

「そこから空気を？」

「海の中なら海水が降ってきますね」

「あの、どうして私と会って下さったのですか？」

「美原澤教授は、私の父と古い付き合いだそうです」

「父に会った事があるのですか？」

「あなたは、ないのですか？」

椎華は、その時に初めてお互いの言葉が歯車のように、きちんと噛み合ったように感じた。

「父が他界したのは、私がまだ3歳の時でした。父の姿は写真で見えたことはありません」

「いいえ、それは違うわ。3歳までは、確かにお父様を見ていたはずよ」

「覚えていません」

「ここへは何でいらっしやいました？」

「車です。自分の……」

「頭の回転が速いのね」

「お話がアクロバットをするんですね」椎華はジョークを言った。

彼女は目の前の女性との会話を、そう感じていた。

「あなたも同じようにアクロバットをしているのよ。私と会話をしているのだから」しかし女性は笑わずに言った。

「どうして私と会って下さったのですか？」椎華はもう一度聞いた。この部屋の構造よりも、彼女が一番知りたいこととは、それだった。

目の前の女性は一度頭を下げてから、再び詩歌を見た。その動作がお辞儀であった事は、直後に判る。

「はじめまして。私は阿賀佐真記と申します。貴女のお名前を教えてくださいただるかしら」

椎華は息を吸ってから、できるだけゆっくりとした口調で言う。

「美原澤椎華です。美しい、原っぱの、澤で、美原澤。澤は、画数の多い方の漢字です。椎華は、椎茸の椎に、華道の華です」

「シイカさんね。あら、素敵な名前ね。研究者にはぴったりだわ」

「よく言われます」椎華は返事をしながら戸惑う。「あの、……逆なんですネ、いろいろと、その……順番が」

「最後には、何が最初で最後かなんて関係なくなるでしょう?」

阿賀佐真記女史は、にこりともせず、そう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2187v/>

まだ誰も知らない【Relieve one another】

2011年7月26日02時19分発行